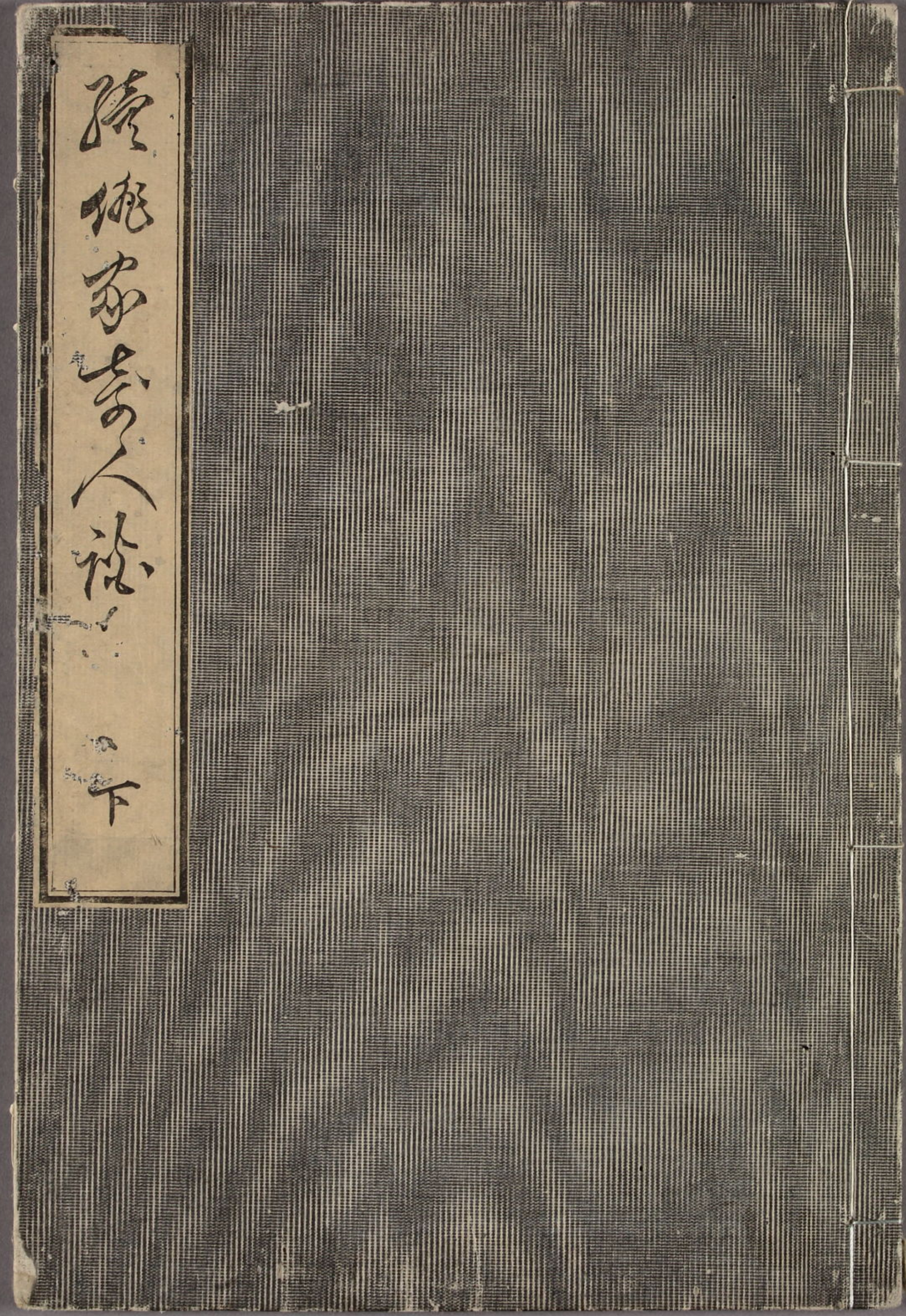




續俳家名人後卷下

故為當 竹内玄玄一遺編

白井鳥醉

白井在在東海上總由地生郡北に邑れ人を口小並びる此豪
家ある人も人れけ先少よりて金山より巨萬の伐を費し
やいなきゆに思ふ相う壯業やう家督をゆづり世に傳
はれ遁る柳居を少うと名を殊といひ牧羊を号し松家
菴二世の宗匠と「先でう所不病もわたり種中し」のふち
小思ひ切る野中うゑ「玉柳やふ髪を拾ふ落の」一ツ家れ打
を中うと時を成あると「俳子れいそぐ紙の中ふ三日目切
うと謙念、旅はるうと人の小庵をらせ出たりうと十日目切
俳子れいそぐ紙の中ふ三日目切うと謙念、旅はるうと人の小庵をらせ出たりうと十日目切

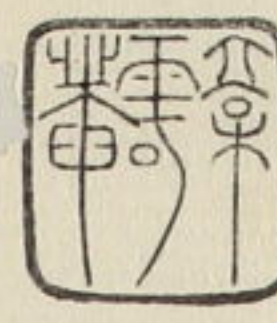
改定画 山房

くくくくく
千々々
るや言つと

お物居

ちんちん
る碑

月乃
つ長
月乃
つ長



志むる小界川の娼婦はちかきと居のれる傍主客は七日
居續けはききたちかきと居のれる傍主客は七日
たき佐多ひき帰庵はききたちかきと居のれる傍主客は七日
習せられ目此の礼儀は似合はききたちかきと居のれる傍主客は七日
花里にゆける八幡はききたちかきと居のれる傍主客は七日
無き乗ドき居つてききたちかきと居のれる傍主客は七日
るを幸ひ帰る来れききたちかきと居のれる傍主客は七日

山は東路

山は東路は人ききたちかきと居のれる傍主客は七日
小居一瓢をりききたちかきと居のれる傍主客は七日
知足福莫大於知足と若しききたちかきと居のれる傍主客は七日
りききたちかきと居のれる傍主客は七日

續非家言

卷二下

三

かくさくちせり紅波「加」たけり猶も八疾を「本」
 茂者あが裏の荒世うまけ二句倭悉おぐえは「城」の云ひどし
 ていさう「か」れ「と」記「た」る時「り」ゆ「う」てれ名「派」多「う」も
 偏「こ」登「あ」る「う」ね

紫子春來

紫子表來ハ江戸の人六盤仙と号シ「正月が来たら相は下結
 の江田家ハ元日見るがとお」名月や花なき里々比丘尼
 あれ古今れ表うひも表残んはるとれあより出て秋の正花とし
 な〜〜ぞ働きある自らの今花の一字と三季と〜こみて
 慢りに正忌とひるハいと興なりとす格別の表紫ありはや
 米仲う記よりハ表來はハ不登暇女の侍氏樹物〜てんけ
 るが或時贅〜「我意ハ釈迦や達磨を仲人〜て其のありけ

おきすゝもがみ又ひと日我庵に来て是れよとわゝるに
 なる田舎を垣を越へて山風をげきき我庵火をたきしに伏
 するがいつの間おきす小袖お火のえつきぬ着こぎに旅やとむ
 紀よくとおきす小袖ひねるが不圖われ失くさるお拘つづれぬ
 とむゆめけどとるに水かなと鹿角とくやめきけ
 とむおきすひやるべし「身いつの標もおれがむづうあうへし
 よれたるぶりのゆめなりと其酒落るるへ

慶紀逸

夢紀巻八江戸の人道を祇堂より傳へて倚柱子と稱し曰時
 菴の号有り一澄神小舟奥も出く二繋ぐる路の定屋古藩の
 質に一以上はとも易しる子也。時はを加てて東に候む
 らぬ。其の面、責にられぬ。榮はねくいひ候し。

宋之詞年々春々花相似歳々年々人不同
トク桃紅の愛嬌を思ひ終るゝさうう新作を待たず
花集或玉河編と著して人の笑ひを求む後かな我買紙書
おろし是をかりし終るゝ今江戸桃紅と稱するはあの人を以て
其擅藝とひられ一時流行し〜秋をえ〜も遂は又もさう
〜さう〜終るに盛れを虧るれ易理をえ〜さうもやま〜
さうもあつたる顔えありし〜おや時〜秘書監鳳岩先生
その風流と稱するの約あり稜々逸氣好風流閑座清吟能
解憂水雲月嶺幽栖意四時常作菴中遊〜さう〜衣袋をさす

俳宗祇漣

祇漣江戸の人祇空にまゐびて自注菴と号し常に俳社小癖
〜日傘をさす〜さう〜死さうあんな〜さう〜花の山

「夜更その日れ共さう〜さう〜」或時點かたとき俗俗わいふわいふ かな〜さう〜
療とあふ〜に贅とあめられて「六月面のう〜」然しかをい
うか一年中あつた〜さう〜「さう〜と知るや花嫁れおの案
儀やうぎのわ〜さうある児時こころをい〜が息の〜さう〜水雲みづうみれ遊
女めは身と殺さる其居そのゐはけお帰完ききんの終はつ紙し来きひさるに〜び〜
ひ〜ひと〜さう〜さう〜就すなはこのひと海小題〜さう
歎なげく〜さう〜祇漣使しちさむひの老〜さう〜とあ〜は〜さう
一句と〜さう〜「さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜
の息いき桃もも名なる古兵ふるへい庫くらを紅梅こうばいなれ之彼その若わか者ものあれ一句〜さう
を翻〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜
或日合歡老人あひぐわんろうじん紙しのさう〜「さう〜さう〜さう〜さう〜
紙しのさう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜さう〜

いふふつゝ百多の向今時の調はつて今れ振舞
奉の後小合ひのと是時世の交違と知れつゝ

西橋妻

西橋は江戸橋系より此に住居人ありて夫婦とも能事と
なりて或夜いつゝ言ひしに西橋はつゝこの能事小調市を
供へて出ゆえとい妻もつゝして出あつゝ「我子ありては
屋に夜の言と風流は西橋そのむと免でなれ一人由き
とて是ふ能事するまゝとわれ冠里の」言れ日やあれも人乃
子持ありひと候伯よりゝ世知るも亦あつゝ

皋月平砂

皋月平砂は江戸の人貞佐がつゝ其以の物語やゝ人その
乃乃荆棘とくふあゝとびゝつゝあゝ頼る和漢の平砂

わい哉と此句のおま小清國の先帝封祿れ文小月燈江
海油風雷鼓板天地第一番戲場堯舜且文武末莽操中淨古今
来許多脚色とい大紀号とつゝれ日本天皇の評判は東あゝと
なとつゝ「月雪や隣の庭は秋庭如來はなれみ
権づゝとありひゝ」かかれと母よりつゝる秋をか史記陳
が傳説「千金の恵やふちや花れ友その作持小裁
るゝもそあゝとゝ若く下の而耐集せはつゝる續而耐
集いゝと刻をび今の平砂が都ふつゝ

中村敷石

武州埼玉郡宮原村の里に中村を名乗る一後河の玉司式部少輔
友原一氏八世の孫と少うゝと風流の道に紅蓮花あり
ハト先達と好く時亨其河かゝる交り後能事なり

袖川百菴と交り雅名を教ふといひ庵と菊圃とを以て
「山笑ひ谷あはれ」の雪解くる「木の屑とあはれ」の春の
うらやみ紙谷を山とてやみおとす持来りては人の校讐成
乞ひてふひてせは戸あけのや「河竹庵と訪ふ」山と上
るは清く父兄の道に人様ひひていへく世人音物を
りてし来りて先生をうやまふあのおまじりするゆゑなり
いそひりてあるはむ山庵とて人音物をりてし来り
来るは物もあはれとてこれに我智の不足を補ふ慈人なり
教はれんはつていふ人とは言てはてしなくはれはれ物
戒問金花石葉集紙借原道といふとせおられればわが
考へてしひつか天明年七月おぬれ辭せ「葵里を松
や歳とせし縁

紙谷吾山

法橋吾山ハ武の紙谷の人ありしより江戸にお来り柳居り
たよりく紙谷とゆふは沙死よりいふく古調おはれおる
て蕉風の紙とえりしを沙市といふも竹の曲あるとゆふ
ありも其人がとてありて一年れ兼旦お「おる」日れ紙乃
ありもや初よりいふ句極いと優はたうてはは文選お天地
萬代之逆旅日月萬代之過客といふおなれと菊斗云より
飲中八仙のわくとをたうてはれ紙よるはる智章と「紙臺
のわたりさういふや昔清お汝陽王と「日れ」なや紙もわたり車
うし左相と「千金の氷雪やせ先て古れ味宗之と「卷天を我
わがわのほちひく蘇晋紙」妙お拂子蠲もはるはれ紙もこ
は夢白と「つぐ」に糸とをくして紙を紙張旭と「夕暮や雪

とくもいゝ雲れを焦遂城「市中乃人」とやうや障のた
 始先初御「〜」又流の國福勝の罪とあゆるに何なるの
 そとちまぬ人のあぬお能沙ある〜「答ふさう〜」一紙紙
 証〜通る〜「〜」折う〜時々のあけバ「我とてをゆる
 こぬ罪やち〜」以「〜」晩多能能来業と著〜蕉翁の海と得
 〜「先輩の来教とあり〜」又流方云物新祿わらふ〜
 ハ皆人れり〜「〜」吾能祿はる吟「花と〜」電ハさの
 を本のお

五竹坊

五竹坊琴た尾州の人能と應元坊より修り流風とあり〜
 一時小鳴る陽を仙と号し「〜」四六の竹小奏り〜
 分門ハあり〜の月或時彼か〜我ハ修り〜被〜

羽筆


泣く

枇杷

う

ぬ

汁あやひ



るえ坊

古所る八條に細波に
ゆるりしと深淵に
以候しとて石内、ちうあ
あら物に十句を合新
色く名ありて細波に
信の河うとて予ねに

治事と我ふゆづり我が傍と彼ふあづけは世に
亦しびしとゆづりと端に「杖合いふ来るか」
是れうか一年の更なるやらん河の傍の動を
とも志を愛せし世に実のきえなりとるもあ
来と許さるる人何じより附合のき座元
送るに附方八條のき細波に十句を合新
そははるのふむふ時の味とて新に百句は
わ有ん附るなき物八十句の合新とて
名ありし細波に十句を合新のとき
そははるのふむふ時の味とて新に百句は

玄武坊

村上氏八邊を業とし江戶約のふ山がはるに

玄武坊よりそ統へる元坊より統へる朴坊より統へる朴坊より
傳へる朴坊より「あちが来りて後れ初く水うみ」門へかき
我が家とそる湯うみ「日よけあひりてとむさう」吾の湯
「淋」その湯うみあちの湯うみ「身とそて小使不助をサ
うねとめ死せしと人の風すけを」死を移るうみとそ
し「花の香をうみ死をうみとち」来たる人にとめて「そ
よりも死をいれり打うみつ子の刺殺するにむしとそ
二子の愁も有る思夜之夢の夢も有る只思ふが夢も不刺
ありちりうみとそ」「缺盆骨はてくくやむかそ
中その調寂然とく味ゆも流の一流を構へく直哉と
ひきつてくうりれ世の變化流行るんより不易の佛
性も在んぬ如くそ」「死をうみ死の誠はむ」松の色あき

尾の八竹坊より又玄武坊より来りて元坊より統へる元
武の統へる統へる統へる統へる統へる統へる統へる統へる
三願の一袖ふむひて「百合の夢も我もうみむかひ」
つん何う「富有りてくく死の資助と成りて人々死
産業のなるれとく死をいれり死の有るを謀る又
死の死をいれり我も死をいれり死の死をいれり死
死の死をいれり又ある法廣死の死をいれり死の死
つん何う「死をいれり死をいれり死をいれり死をいれり
て死をいれり死をいれり死をいれり死をいれり死をいれり
何れと命をいれり死をいれり死をいれり死をいれり死をいれり
や今流の一流と後世の死をいれり死をいれり死をいれり死をいれり

あうとそうけせけりも當時おわいといふ等海を嘆
きぬものありし

龍門曉臺

曉臺ハ尾州公の藩士にけり仙仙と英漢の仙某あする
びもや蕉風の顔と感泣く一風と記しおろく元の事
号と物せんと思ひ立し一勅の得るこあらそ君の勅れと
浪々たり燈るに光あつてきたり此仙居と評する
名古屋の町に移りて普雨巷と号し周舉も認つても
称せし「振袖の大和なう」日の初め「燈やれて有るけ
の四月」本の家末の系や花本董「曉や録のりや」
の海老小童んとするはつて戸を換へて「方れ清光小松小寶
曆中よりこの松一松島と一見して「隆興殿の源彦く

千松島とせしが其解いまだ佳境小のびとそ此の強客に
て合るもぬ和申あそびり「松島や果はうろく夕あや
と仙公あはれ一解小初め清しん」も爰に感泣く「うとん
何れのうとや初めせや」うと建敷下小居れ参殿はうとん
やう「あや清く早の清く」たりとふるその名中うやくと
ふふふ自り清くとける教句「春柳小は路のふとあれと
「春とあふらや春の古堂を」頼鶴のたかうする新即

谷口蕪村

谷口蕪村ハ姓與謝名ハ長庚字ハ春星と果東成と号し常
に和漢の古小耽く稗史小説までも渉らばとふ夏あしそ人
と取り蕪村うと物小拘らば時り「古学は蕪村のりてん
変るといふも礼法と正しめをたふさば已に

うゝ水居小家居以妻子バヤ一たふ小我を時々く網
うら砂どじ撫いそく於の市にわく帰路酒を愛ひし
みく海冷ひとふ「三枕の難貴かやや長者振目姿卓然
「春の海むねのひのたりうゝ悠々無涯」花日破く帰るこ
想一本拙子洒落自在「昨捕とあれ」と樹下に座る生
清涼「そけり飛ぶ富士の裾野の小家より譬喻無比」こゝを
うゝを淡かきむ寄げや「取西上人更得其趣」練愛中
刀とありとて「年守や乾壁れを刀鞘の持共意氣揚々偏邪
其成之自然に好む西の滑稽その楽化とてる千載の下を其
人ありとのべ「又画居以謝寅とふ初め漢画より今後小風
と記ひ世の人の知る所そのひとてふ當時大雅堂と伯仲は
や平安の湛園先生頻謝蕪村江村之圖の約りうゝを顔とる

蘭更居士

蘭更居士ハ醫と業とくく京初ふは光りるを加賀れ希圖
はあひて折かゝ俳席とも立ける時小當り蕪村曉窓を
とれ名家はけがこれしうゝ年月とある或く加賀の何
某うゝうて今暮曉のま植はぞ不致く近き小俳社の株
か「汝居我」く時このつれををわづらふと有る業範成
庭下小投也くく案更大ひ小舞をを成俳のうゝむける
より於鄙小隠れある字海と成りし「ひふや煙りれ中
梅のむ」日の新とわづらふ移むる堂廟や「枯河」の目く
とれく流連うゝむとせ東山は御の途中佐徳のむとふの歌
錢を何来が後う許小旅宿れ折くうゝとておぼく「古

世画とてんが中不意箱自筆の契れ細紙成りててふとて西國
の門人多う中不意の少枝が向ふれにふりて人の居ぬる事い
ふ旅状の筆よりて小枝が向ふててとて載せたる翌朝よりて後
あつての足跡よりて大ひふちよりてとて史よりて史をみたり人
んせはるものなり

渡邊岱青

渡邊源左衛門尾陽の藩士とて代々織作の職よりてなり
常小乳癖を好む装束等も合はれやとてとてとてとてとて
笑ふ居る要如くハ被揚旗が操とせられあふべし一昨は
曉登が門小入る老孝と号し「様ちりて花のをいふる
うね」時を文鳴りてその新ハ長し「采女も遊坂の松小隠れ
る一本枯のさへ地小鳴りてはや折や」一昨は遊を殺る酒肴

と抱ける代ありて己が庭中の土成る腐土とて六人入来り
て泥土をそとび出れ時一昨は客あきとて席小隠れいといふ
事半にわき今日の徳進何の風情もは庭あき曉はくりて
客人の興小使くねと減しやとてとてとてとてとてとてとて
しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
り抱ける元山せつとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
興んとすた興も若なりとてとてとてとてとてとてとてとて

井上士朗

井上孝庵徳名士朗尾州名古屋新町小住に素より物小拘り
されども客実ある其性よりてとてとてとてとてとてとて
勢いよりてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

りつれ病人と扱ふおろし法玉の強害つゝひ來り枕邊やじ
時るも其機とくしあるあゝこや人の及ばざるあり
初とせ水の不庭ふ嘗れ來りこゝと庭掃のそのこの若るか
「美多代りといはる梅の垣あり」伊勢の平居室にその花乃
浮木ありとせで文士の性來るえんばも或れ休生に來り
控びてそはこりりふゆゑと「松坂のまつこを去乃こ
よりあれは日平家うゝうゝ樂とせ」あや「琵琶とて
あづかむと月の雪大和の雪の御より歌火山いつく耳梨
ゆゑとれどとあるゆゑの御ありに推されざるをゆゑ
そのうゝ物まうゆゑのうゝ物とてゆゑ免けどゆゑとて
花もなれは」世人も耳なりゆゑは落葉松花月一雙の花ひ
かりこれ日も既りてふれてもゆゑは一瓢の酒の残りびくなく

花うれはと花せり「瓢箪とて輪かゝるゆゑは平生瓢箪
ゆゑとて人より自賛の句「有る月夜有る雪時を新卯と何處
の年より病にゆゑ」是る事と初述や田圃の院後居られ
終極とて花うゝ初見代書が同僚を待て紅糸乃宴成
りゆゑと算たぢふゆゑとふ席上庭中かうゆゑとあり紅
糸とてゆゑと只不端と名けるがゆゑとあると客ふむひと句
あるんば事あるかれ士朝法と入る答へる「一字の教句
出たり教りゆゑと人蕉而ふ八葉の号と稱する文の霞の松の葉ひ
葉の梅は葉ふゆゑと月の新か雪の夜ふ葉ふ日も若く風雅
と稱するふ時とては連や時の浮葉にゆゑとて花ひみかこの葉の
か葉とて程向れ葉守と並ゆゑとてその名葉ゆゑと無きなり

川上不白

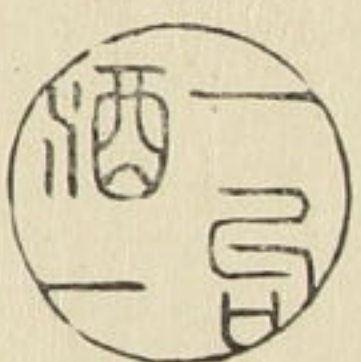
川上平白（せんせい）は、姓（せい）は、藤原（ふじわら）なり。先祖（せんぞ）より、紀（き）の新宮（しんぐう）侯（こう）に仕（つか）へり。已（い）十六歳のとき、より、東河（とうが）の額（おき）き千（ち）如（に）か富（ふ）に就（つ）き、茶（ち）のり（り）とまゝる（ま）び宗（そう）君（きみ）と初（はつ）名（な）より、日夜（にちや）の琢磨（たくま）あり、その乃（の）に鑑（かん）奥（おく）あり。我（われ）就（つ）以（もつ）以（もつ）進（しん）ぶふ、家の風流（ふうりゅう）弘（ひろ）ん若（わか）ハ海（うみ）よりあゝ、波（なみ）有（あ）べり。いであや身を立（た）て、名（な）を揚（あ）げ、こゝに旅（たび）立ち、ま隙（ひま）の沙（さ）の「秋風（あきかぜ）ふりて、帰（かへ）るや、東人（とうじん）と餓（う）せ、こゝにおもひ江戸（えど）より帰（かへ）来（き）、熱雪（ねつせつ）蓮花（れんげ）の二（ふた）慈（あわれ）といふありて、より、そ花（はな）法（ぽう）今（いま）お針（はり）より、けりある、是（こゝろ）の僧（そう）ぐ切（き）丈（さ）より、て抗（か）り、こゝに不（ふ）羨（せん）菴（あん）不（ふ）白（はく）といふ、るも陰翳（いんいつ）居士（こし）が唐靴（からくつ）より、返（かへ）り来（き）れるぞ、又（また）古（ふる）をそぶの風流（ふうりゅう）こゝる、或（ある）は孤吟（こぎん）あり、奇田（きでん）形（かたち）奇（き）あり、これ結（むす）号（ごう）あり、時の帝（てい）拜（はい）白（はく）殿（でん）日光（にっこう）波（な）店（てん）官（くわん）も、是（こゝろ）に、これ、常（じょう）より、を言（い）をられ、ぞ名（な）譽（よ）あり、や、そ、以（もつ）の、大智（だいち）徹（てつ）大川（だいせん）、弟（あに）輝（てる）無（む）学（がく）龍（りゅう）門（もん）弟（あに）叔（しやく）大（だい）類（るい）号（ごう）と、友（とも）より、より、そ介（けい）弟（あに）榮（えい）山（さん）乃（なり）

湛江（たんかう）和（わ）者（しや）本（ほん）方（ほう）寺（し）の目（め）詮（せん）上人（じやうじん）あり、と、長（ちやう）入（に）家（け）哲（てつ）海（かい）意（い）正（しやう）玄（げん）利（り）弟（あに）が榮（えい）ハハ、もの、又（また）能（よ）結（むす）と、好（この）みあり、こゝに、以（もつ）は、沽（こ）洲（しゅう）あり、より、中（ちゆう）比（ひ）種（しゆ）琳（りん）は、する、あ、び、老（らう）く、夢（む）を、こゝる、あ、れ、常（じょう）より、と、た、れ、得（え）か、こゝる、一（いつ）寺（し）宗（そう）雪（せつ）と、嗣（し）子（し）家（け）門（もん）あり、と、て、「懷（わい）慕（ぼ）の末（まつ）榮（えい）あり、と、て、子（し）代（だい）の表（ひょう）目（め）、菴（あん）茶（ちや）湯（たう）詩（し）合（が）あり、と、て、時（とき）呀（や）より、て、君（きみ）乃（なり）階（かい）出（で）より、と、て、「澄（せい）君（きみ）れ、こゝも、茶（ちや）湯（たう）の花（はな）香（かう）る、撫（ふ）く、亭（てい）夢（む）あり、と、て、そ、び、こゝる、こゝも、茶（ちや）湯（たう）の、花（はな）香（かう）る、こゝも、花（はな）の、夢（む）を、目（め）の、れ、ぞ、う、あ、る、より、い、つ、こゝも、夢（む）の、こゝも、と、あ、る、と、れ、と、て、嘆（なげ）と、君（きみ）の、い、ひ、け、ん、夕（ゆふ）櫓（ろ）と、あ、る、と、い、は、や、お、櫓（ろ）と、あ、る、と、眠（ね）る、茶（ちや）湯（たう）の、二（ふた）子（し）と、と、て、ひ、又（また）その、子（し）の、病（びやう）返（へん）と、て、「雲（うん）君（きみ）と、い、は、や、け、こゝの、ひ、つ、つ、秋（あき）を、も、や、ふ、明（めい）る、と、い、は、や、あ、る、と、海（うみ）に、有（あ）り、と、て、和（わ）者（しや）の、室（しつ）あり、と、て、お、菊（きく）乃（なり）花（はな）い、ろ、こゝ、か、と、海（うみ）と、い、は、や、と、て、と、て、祖（そ）居（き）を、久（きう）夢（む）の、茶（ちや）湯（たう）あり、と、て、

藍田西

不名周

抄 障



Handwritten calligraphy in a rectangular frame, featuring large, expressive characters and wavy lines.

Handwritten calligraphy in a rectangular frame, featuring large, expressive characters and wavy lines.

Handwritten calligraphy in a rectangular frame, featuring large, expressive characters and wavy lines.

Handwritten calligraphy in a rectangular frame, featuring large, expressive characters and wavy lines.

大島雪齋

大島陽喬俳名ハ蓼太と云空齋居士と稱シ雪中菴二世の家
沙ちうきうき二世更此沙の傳燈を嗣ぎより苗も氣韻を
さへもより後を遺す門人教多うきうき又杖を曳ハ幸に
寄縁あり原の白隠禪師の麈尾下に丹田を煉る事多成
積り遂ハ室曆己卯の冬免許と云ふ書を小田大島雪中破
却兩重関所謂隻手與音聲也云云又安永乙未歲陽明人
蓼太の他ある本の一をひく來舶の漢人ハ示ハ空譯士ハ然
それと傳ふと云ふ大島俗ハ非と云ふ書一と一帝ハ稽る
一章ハ云

撒蜜他列耶阿兒要披捉革尼麼子那次吉 蓼太

蓼太先生者隱君子也都人士以爲金馬侍從之流亞矣 中畧

蓋僕亦有所感也因賦一絶寫其意倣輦之誚所不辭也

長夏草堂寂連宵聽雨眠何時懸月色松影落庭前

乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劍南

又安永乙酉夏蓼太句集を刊刻せし序の他ある語ハ東都
蓼太以善俳諧歌聞于世 有是哉昔者晁卿與唐人酬和明
人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋
未知有連歌也而況俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始云
思ふに漢人の和韻ハあつたうハ誠ハ風雅のめいやくと云ふ
はるか昔又南畝子の言の如く俳諧あるハ是より一と彼ハ國人
も志するところハ一家の名譽何ハ世にあるべきや抑もこありし
昔の芭蕉庵の詠といふ今ハ何ハ侯の邸内ハ彼ハこれハ時々の
回覧のあつたを養ふ人といふも是をく膝を足るものハかハ

